

杉並出身の写真家が小千谷の魅力発信

4日、杉並区役所では、写真展「小千谷の四季～ここに映った風景」が始まりました。この写真展は、杉並区出身で長岡技術大学教授の松原浩（55歳）さんが、心の琴線に触れた里山の風景を紹介するもので、都会生まれ都会育ちの松原さんが、初めて見た時に不思議と「懐かしさ」を感じた風景を写真に収めたものです。展示は40点で、来場者は1枚1枚足を止めて眺めていました。展示は、15日（金曜日）までです。

松原浩さんは、幼少期を杉並区で過ごしました。30歳を目前に、現職の新潟県長岡市の長岡技術科学大学で、化学の教鞭を執るようになりました。もちろん、東京から長岡市に生活の拠点も移すことになりました。新潟に移り住んで、強く感じたのが、「ここは、いつか還ってくる場所だった」という思いでした。東京生まれ東京育ちの松原さんですが、日本人がもともと持っている農耕民族のDNAに響くような、不思議な感覚を覚えたそうです。そうして、松原さんは長岡市や近隣の小千谷市の四季折々の棚田や里山の風景をカメラに収めるようになりました。すると、その作品が小千谷市の農協のカレンダーに採用されました。農協のカレンダーですから、市内の多くの家庭に配られ、自分のまちの魅力を知ることになりました。その評判は、たちまち市役所にも届き、定期的に写真展が開催されるようになりました。杉並区役所での写真展も、昨年次ぎ今年が2回目です。小千谷市が、杉並区民向けにまちの魅力を知ってもらうために開催したものです。

初日の今日は、撮影者の松原さんも会場に駆けつけ、来場者に対し作品の前で和やかに談笑していました。来場者の印象も、松原さん同様に「懐かしさ」を感じるようです。小千谷市は、距離は200キロメートルありますが、新幹線で90分、関越自動車道も通っていて、東京から日帰りができる、そんな「ほどほどの田舎」が売りです。そして、そのほどほどの田舎に、こんな素晴らしい四季の風景が残っていることを知ってもらうために、この写真展は開催されています。写真展は15日までで、11日10時から、松原さんのトークショーも予定されています。

